

人形技法による母子関係

日本社会事業大学

石井哲夫
田辺敦子

園児を保育する場合、保育者が何よりも大切にしなければならぬことは、子どもの一人ひとりを正しく理解しようとする努力であらう。子どもに対する正しい理解を深める為に、行動観察や各種の検査やまた母親との面接などが行なわれるわけであるが、殊に母親との関係についての資料を得ることは、非常に重要な手掛りをつかむことになる。幼児の情緒的な問題を生み出す源の多くは、この母子関係にあるからである。

ところで、母と子どもの関係について母親の子どもに対する感情、意見などを知ることが、母親と直接話をする事で比較的簡単に得ることが出来るけれども、子どもの側で母親をどのように感じているかということについては、なかなかはっきりさせることがむずかしい。

何故なら、幼児の言語はまだ十分に発達していないので、直接質問をしてみても表現する方に限界がある。断片的な感情は表現されても、それ以上に深化することが少ないのである。幼児のもっている対人感情、或いはその子どもを取り巻く人間関係を豊かに表現させる一つの試みとして、人形を使つての面接を考えたのは、そのようなことばの表現を補うものとして人形を動かすという行為を取り入れようとしたからであった。つまり、幼児はことばによる表現は十分ではないが、身体を動かすということによって表現の不足を補

っている。人形の手足を自分の手足のようなつもりで動かし、また自分が人形と一しょに部屋の中を歩き廻るということが、ことばの表現を助け、更にことばでは表現できないような力動的な動きを表わすのである。

人形を使つて話をしていても、ただ机を前にして座っている時の感情表現と、すっかり人形の役割になりきつて動きも活発になった時とは、内容や発言の量でも大きなひらきがある。

更に人形あそびという遊びの形式をとることが、子どもの素直な表現をひき出し易い要素にもなっているのであらう。

今回は、人形技法を用いて要求を媒介とした父親、母親、子どもの三者の関係を捉えようと試みた。被検者は、保育園、幼稚園の五才児各十名である。場面設定は第一表の通りであるが、B場面を分析の対象としB場面において発言された母親のことばを、父親、母親、子どものいずれの立場に立つて発言されているかという三点を拠点として分析してみたものである。

第一表

時間	指示 (Tの働きかけ)	態度役割役割	TのCのTの	場面
0'	お父さんの万年筆貸して	固執	M	A ₁
3'	園をやめてもいいでしょう	要求	M	A ₂
6'	△役割、交換▽ 子どもに万年筆何故貸した	叱責	M	B ₁
9'	園を休ませては困る	非難	M	B ₂
12'			F	B

M=母親 F=父親 C=子ども

T=検査者

分析基準は次頁の七項目である。

第二表 B₁B₂場面における母親の態度の変化(1)

B ₁		数	B ₂		数
最初の態度	最後の態度		最初の態度	最後の態度	
防衛	衛場	7	防衛	衛場	1
防衛	父の立場	6	防衛	父の立場	1
防衛	分	1	子どもの立場	父の立場	6
防衛	自己の明確化	1	子どもの立場	分	1
子どもの立場	自己の明確化	2	子どもの立場	葛藤	1
子どもの立場	分	1	子どもの立場	子どもの立場	0
子どもの立場	子どもの立場	0	父の立場	父の立場	3
発言一回	発言一回	2	自己の明確化	自己の明確化	1
			自己の明確化	防衛	1
			自己の明確化	父の立場	1
			不明	自己の明確化	1
			不明	発言一回	3

(2)

	B ₁	B ₂
子どもの立場に一度もたたない者	13	6
父親の立場に一度もたたない者	5	3

*
*

*
*

分析の結果は、B₁B₂場面を通じて母親は父親の叱責の影響を受け易い。
一場面は三分間であるが、その間における母親の態度の変化過程を調べてみると第三表のような結果になった。これは、前の結果を

子どもに同調した役割(記号) F
父親に同調した役割 L
自己の明確化 E
その他、葛藤 C
分離 S
不明確 N

子どもに有利な提案 F E
父親に有利な提案 L E
自己防衛 D
不明確 N

フィンガー・ペインティング

のなかの人間関係

(クレヨン画法との比較による)

日本社会事業大学 石井哲夫

藤原貞子

フィンガー・ペインティング(f・p)の特長は描いていくみちすが今までに知っている知識や方法にたよるだけではうまくいかないことである。例えばえのぐをつける筆がない。指を筆の代用にしても、つけたえのぐはすぐなくなってしまう。画面は水でぬれているので細く輪廓を描こうとしてもくずれてしまう。といった具合で、しかもそのうちに手は汚れる、えのぐの感触がぬるぬるする。画面も汚れてうまく描けないなどいろいろ予測しなかった状態があらわれてくる。これはクレヨン画(c・p)のようにみちすがはつきりしていきとみる事が出来る。しかし全然みちすががないのではなく、子どもがその困難さに積極的に立ち向っていく時みちすがが開けてくるので、その時こそ子ども達の自発性がひき出され陽画から陰画へ変化し、f・pの独特の開かれた境地へと入っていくのである。というように私たちは考えて研究を進めている。

更に裏付けることになる。つまり子どもの演じた母親は父親の力に動かされ易く子どもや自分の立場を持ち出すことは少ないということである。まだ残された問題は多いが、しかし各場面にみられる態度変化は、五才児の母親に対する役割理解を示しており、人形技法の有効性を確かめることができた。(大会抄録25-27頁)